

国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識 —「夫日本人、妻外国人」夫婦の夫婦単位での特徴を中心に—

伊藤 孝恵

要 旨

本研究では、日本における「夫日本人、妻外国人」夫婦の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識を探るため、日本人同士夫婦との比較を試みた。配偶者、及び自分のコミュニケーション態度の認識について、因子分析を行った結果、配偶者、及び自分のコミュニケーション態度の認識とも、それぞれ「親和的接近」「自己中心」「非円滑」の3因子から成ることが示された。それらのコミュニケーション態度の認識について、国際結婚夫婦と日本人同士夫婦とを比較したところ、国際結婚夫婦の方が、自分や配偶者が「親和的接近」や「非円滑」な態度を多くとっていると認識していた。また、国際結婚夫婦の間で、コミュニケーション態度の認識について比較したところ、日本人夫と比べ外国人妻の方が、自分が「非円滑」なコミュニケーション態度をとっていると認識していた。

【キーワード】国際結婚、夫婦間コミュニケーション、親和的接近、自己中心、非円滑

1. はじめに

法務省入国管理局の統計によると、平成20年末現在「日本人の配偶者等」¹の在留資格での滞在者は245,497名と、外国人登録者数全体の11.1%を占めている。ただし、その内訳は、「夫日本人、妻外国人」²の結婚形態が「妻日本人、夫外国人」を数的に大きく上回り、外国人妻の国籍が、中国、フィリピン、韓国・朝鮮、タイといったアジア諸国で全体の9割を占めるという特徴がある。

佐竹(2006)によれば、1980年代半ば、山形県を発端に町や村役場が民間の結婚業者と提携して、地域の男性と外国人女性、その先駆けとしてフィリピンの女性との結婚を取りまとめる動きが始まったという。当時の、農村部における日本人の男性とアジアの女性との国際結婚の多くは、自治体や結婚斡旋業者が媒介となり、深刻な嫁不足解消にアジアの女性に期待を寄せる日本人男性側と、社会的・経済的に自分より上位である相手との上方婚を望むアジアの女性側の思惑の一致によるものだとされている(遠藤 1998, 葛 1999)。

その一方で、新田(1995)は、大都市や地方都市では、職場や学校など個人が所属する何らかの集団において、日本人と外国人が接触する機会の増加に伴い、恋愛による国際結婚が増えているようだと推察している。ただし新田は、こうしたグローバルレベルでの個人的な人と人の接近にも、

国家間の経済格差や国内の男女人口比率の不均衡などから生じる人口移動等が関連しているとも指摘する。

このような様々な社会的・経済的背景から、今日では「20組に1組が国際結婚」(朝日新聞, 2005年1月8日朝刊)と言われるほど日本において国際結婚は広まりつつある。しかし、従来の国際結婚に関する研究では、特に日本社会への適応において非欧米出身の外国人妻の抱える問題に焦点を当てたものが大半を占め、夫婦関係を詳細に分析したものや夫婦間コミュニケーションに関する研究は依然極めて少ない。

また、これまで日本人のコミュニケーションは、欧米人と比べ言語による意思や感情の表現が重視されてこられず、よって夫婦間コミュニケーションに関する研究も欧米と比べ少ないと指摘されてきた(木田 1987)。近年では日本においても夫婦間コミュニケーションに関し様々な角度からの研究が行われているが、それらの日本人同士夫婦を対象とした研究が、国際結婚夫婦にも同様に適用できるのかどうかは疑問である。

そこで本研究では、日本における国際結婚夫婦を研究対象として取り上げ、その夫婦間コミュニケーション態度の認識について、日本人同士夫婦との認識の違いを示すことで、その特徴を明らかにすることを研究課題とする。また、都市部を中

心に今後さらに恋愛による国際結婚が増えていくであろうことから、本研究対象者を日本の地方都市に暮らし、行政や結婚斡旋業者を介さない出会いを経て結婚に至った「夫日本人、妻外国人」とその周辺の日本人同士夫婦に絞ることとした。

2. 先行研究

伊藤(2000)では、外国人妻の日本社会への適応に関わるソーシャル・サポートのうち、同国出身者との接触と情緒的サポートが重要であることが明らかにされている。それと同時に、夫との夫婦関係の安定性と夫からのソーシャル・サポートが、彼女たちの日本社会での自己開示や自己実現の橋頭堡として認識されている事実も浮かび上がってきた。

松本(2001)では、フィリピン人の妻と日本人の夫の国際結婚夫婦を取り上げ、フィリピン人の妻が日本人の夫に対する要望として、「夫の育児・養育への協力」とともに「夫との共有時間をもっと多くもつ」ことを8割強が重要であると見なしているほか、「夫が妻ともっと一緒に外出すること」を6割の外国人妻が願っていることも明らかにされている。そして、これらの夫に対する要望は、家庭内での妻の孤立感と相関関係にあるという。つまり、言語的コミュニケーションに限らないが、外国人妻にとって日本人夫とのコミュニケーションが多いと感じられるほど、家庭内での自分の居場所や安堵感が得られやすいということなのだろう。

国際結婚夫婦の言語的なコミュニケーションについては、施(2000)において、「妻日本人、夫外国人」の夫婦よりも「夫日本人、妻外国人」の夫婦の方がコミュニケーションが活発で率直であり、コミュニケーションの情緒的共有感も高いことが指摘されている。その理由として施は、国際結婚夫婦を取り囲む厳しい社会環境と夫のリーダーシップを挙げている。家庭の外で働く外国人夫は、言葉や習慣等に不慣れな環境の中でストレスを多く抱えているため、そのストレスによって夫婦間のコミュニケーションでは日本人妻に依存しがちとなり、リーダーシップを積極的にとれないからではないかという。一方、「夫日本人、妻外国人」の夫婦の場合、日本人夫は母国にいる慣れと日本事情に対する理解の自信から、外国人夫と比べストレスを家庭内に持ち込むことは少なく、さらに

外国人妻のストレスの解消の手助けも可能であるからであろうと施は示唆している。つまり、一般的な傾向として感情の共有や関係性の確認をするためのコミュニケーションが女性より少ないとされる男性(Gray 1992/大島訳 2001)が、コミュニケーションに積極的に参加することにより、夫婦間のコミュニケーションが活発で情緒的共有感の高いものとなると思われる。

また、現地の言語を外国人妻がどの程度できるかによって結婚満足度が異なることが示唆された研究もある。竹下(2001)では、日本ではなく、台湾における台湾人の夫と日本人の妻の国際結婚夫婦を取り上げているが、台湾においてはいわゆる外国人妻に該当する日本人の妻の北京語(または台湾語)でのコミュニケーション能力が高いほど、夫、妻ともに結婚満足度が高く、この傾向は日本人の妻よりも台湾人の夫の方により強く現れたという。

施(1999)では、日本における国際結婚(夫か妻どちらか一方が日本人)の夫と妻の間で、使用言語能力と夫婦間コミュニケーション態度の関連性について検証している。施によると、夫は妻の使用言語能力が低い場合と高い場合に率直なコミュニケーション態度をとっているのに対し、妻の率直なコミュニケーション態度は、夫の使用言語能力からも自分自身のそれからも影響を受けないのだという。しかし、施の研究では、日本人夫も外国人夫も一括りに「夫」とし、また日本人妻と外国人妻も同じく一括りに「妻」として分析されていることから、日本人夫と外国人妻それぞれの夫婦間での使用言語や、コミュニケーション態度に対する認識が明確ではない。

そこで本研究では、国際結婚夫婦のうち「夫日本人、妻外国人」の夫婦に焦点を当て、夫婦間での夫と妻の使用言語や使用言語能力の認識、また、互いにどのような言語的コミュニケーション態度をとっていると認識しているのか、その特徴を明らかにする。

3. 研究方法

3.1 研究対象者

本研究の分析対象者は、山梨県とその近県に在住する、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚夫婦である。また、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識の特徴を明らかにするため、日本人同

士夫婦を比較対象として分析に加えた。

回収できた回答のうち、夫、妻とも回答し夫婦単位での回答が成立しているものを分析対象とした。また、特に国際結婚においては、夫婦が出会った方法・きっかけのうち、「恋愛」「友人・知人の紹介」の場合と「お見合い」「結婚斡旋専門業者」の場合とでは、夫婦関係になんらの違いがあると推測されることから、本研究では「お見合い」「結婚斡旋専門業者」を介して結婚した夫婦を除外し、「恋愛」及び「友人・知人の紹介」で知り合った夫婦のみに限定した。さらに、日本全体の統計結果の特徴に合わせ、外国人妻の出身が欧米諸国である 2 組の夫婦を対象から除外した。その結果、最終的に分析対象として有効な国際結婚夫婦の回答数は 34 組(68 名)であった。そこで、同数の日本人同土夫婦 34 組(68 名)を、回収した回答から無作為に抽出し、合計 68 組 134 名を最終的な分析対象とした。

3.2 調査方法

調査の方法は質問紙調査で、地域の日本語教室等で日本語を教えているボランティアや、市役所の窓口担当者、日本語学校などに対し、調査対象者への配布を依頼した。日本人同土夫婦については、市役所や日本語学校職員、または国際結婚夫婦の友人・知人等、できる限り国際結婚夫婦の周辺や接点のある人々に調査協力を依頼した。質問紙は、日本語版のほか、英語版、中国語版、韓国語版、ポルトガル語版、スペイン語版、タイ語版を用意し、回答後は封筒に入れ、そのまま調査者宛に投函してもらう形で回収した。調査時期は、2008 年 5 月から 11 月までであった。

3.3 調査内容

自分そして配偶者の夫婦間コミュニケーション態度についてどのように認識しているかを探るため、夫婦間コミュニケーション態度の諸相についてその認識度を測定する質問紙を作成した。質問紙の作成にあたっては、国際結婚夫婦 3 組と日本人同土夫婦 3 組に対し、半構造化面接による予備調査を行った。この予備調査の結果と、夫婦間コミュニケーション及び異文化間コミュニケーションに関する先行研究を参考に、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識を明らかにするための質問 25 項目を作成した。また、コミュニケーションは夫婦間で双方向に行われるものであること

から、質問 25 項目について、「自分から配偶者へのコミュニケーション態度」(以下、「自分のコミュニケーション態度」)、並びに「配偶者から自分へのコミュニケーション態度」(以下、「配偶者のコミュニケーション態度」)の双方から別々に尋ねた。そして、各質問に対し、「とてもそう思う(5 点)」「そう思う(4 点)」「どちらともいえない(3 点)」「そう思わない(2 点)」「まったくそう思わない(1 点)」の 5 段階で評定を求めた。その他、属性、夫婦間の使用言語と使用言語能力、会話量などについても尋ねた。

4. 調査結果

4.1 回答者の属性

本研究の分析対象者は、国際結婚夫婦 34 組(68 名)、日本人同土夫婦 34 組(68 名)の、計 68 組 134 名である。国際結婚夫婦のうち、外国人妻の国籍は、中国が 17 名で最も多く、次いでフィリピンが 6 名、タイ、ブラジル、台湾が各 2 名で、ほか韓国、ラオス、ポリビア、ペルーが各 1 名であった。

年齢の平均値は、国際結婚の日本人夫が 45.91 歳、外国人妻が 36.76 歳と、夫と妻の年齢の平均値に 9.15 歳の開きがあった。日本人同士の夫は 41.71 歳、妻は 38.82 歳で、こちらは 2.89 歳の差だった。結婚年数の平均値は、国際結婚が約 7 年、日本人同士が約 11 年であった。現在の職業について、「家業・自営業」「正規被用者」「経営者・役員」「非正規被用者」「家事従事」「その他」から選択してもらった。その結果は Figure1 の通りである。国際結婚、日本人同士とも、夫の職業は「家業・自営業」もしくは「正規被用者」か「経営者・役員」がほとんどである。日本人同士の妻は、「家業・自営業」または「正規被用者」と、「非正規被用者」または「家事従事」がほぼ同数あった。一方、国際結婚の外国人妻は、「正規被用者」が少なく、「非正規被用者」または「家事従事」である割合が、国際結婚の日本人夫や日本人同士の夫、妻と比べ相対的に高かった。

4.2 使用言語、使用言語能力

国際結婚夫婦の間でどの言語が使用されているのか尋ねた。その結果、日本人夫の 34 名中 31 名が主に「自分の言語」を使用していると答えたのに対し、外国人妻は 30 名が「配偶者の言語」であると答えた。夫婦間で主に外国人妻の言語を使用

しているという回答は、本調査では見られなかった。また、「自分の言語と配偶者の言語が半々」、「第三の言語」を使用している者は1、2名だった。つまり、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚夫婦の会話では、主に日本語が使用されており、外国人妻の言語が夫婦の間で使用される機会は稀である。また、使用言語がどの程度できると思うかについては、外国人妻34名のうち「あまりできない」者が4名おり、「まあまあ」と答えた10名を合わせると、4割弱の外国人妻が、夫婦間での使用言語力(日本語力)が十分であるとは認識していなかった。

4.3 夫婦間コミュニケーション態度に対する認識

4.3.1 夫婦間コミュニケーション態度に対する認識構造

夫婦間コミュニケーション態度に対する認識構造を把握するため、まず配偶者のコミュニケーション態度の認識に関する25の質問項目について因子分析を行った。因子の抽出には、主因子法を用いた。クォーティマックス回転を行い、スクリープロットにより因子数を決定した結果、3つの因子が抽出された。その因子負荷はTable1の通りである。なお、因子ごとに項目間の信頼性を検討するため、クローンバックの α 係数を算出したところ、各因子とも.85以上の強い内部一貫性が認められた。

第1因子は、「夫/妻が分からないことは丁寧に説明する」「適切なアドバイスをする」などの助言・説明に関する項目と、「夫/妻の気持ちに共感しながら誠実に聞く」「夫/妻の一日の出来事や様

子に関心をもって尋ねる」など共感や関心に関する項目の両面から成ることから「親和的接近」と命名した。第2因子は、「あなたの話より自分の話を優先する」「日常生活に必要な用件を命令口調で言う」「話の内容が気に入らないとすぐ怒る」など、相手を威圧する態度や、自分中心に会話を展開しようとすることから、「自己中心」と名づけた。第3因子は、「文法や言葉の使い方が不適切だったり間違っていたりする」「話があちこち飛んで言いたいことがまとまっていない」「あなたの問いかけに的外れな返答が返ってくる」など、スムーズなコミュニケーションの妨げとなる態度に関する項目から成ることから、「非円滑」と名づけた。

次に、自分のコミュニケーション態度の認識について、配偶者のコミュニケーション態度の認識に関する25の質問項目と同様の内容を、立場・方向性を反対にした25の質問項目に対し因子分析を行った。因子の抽出法と同転法、因子数の決定方法は、配偶者のコミュニケーション態度の認識と同様の手法を用いた。その結果、3つの因子が抽出された。その因子負荷はTable2の通りである。クローンバックの α 係数を算出したところ、各因子とも.85以上の強い内部一貫性が認められた。第1因子、第2因子、第3因子とも、構成する質問項目が、配偶者のコミュニケーション態度の認識の因子と項目数、項目内容とも同じであったため、それぞれ「親和的接近」、「自己中心」、「非円滑」と名づけた。

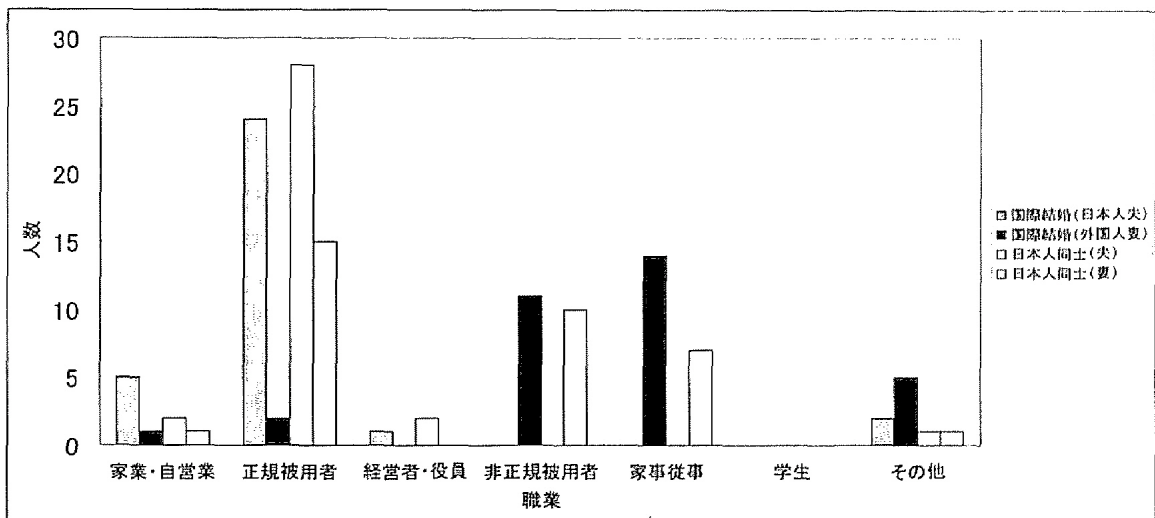


Figure 1 職業

Table 1

夫/妻のコミュニケーション態度に対する認識

	因子1	因子2	因子3
第1因子: 親和的接近 ($\alpha=.953$)			
出来事や感じたことを気軽に話してくれる	.864	.053	-.016
あなたの気持ちに共感しながら誠実に聞いてくれる	.851	-.145	-.110
あいづちを打ったり返事をするなど、あなたの話にきちんと応えてくれる	.841	-.135	-.151
あなたが頑張ったことやいいところを褒めてくれる	.814	-.209	.047
あなたの一日の出来事や様子を関心をもって尋ねてくれる	.787	-.182	.132
あなたへの愛情や感謝の気持ちを口に出して表してくれる	.783	-.139	.065
何か心配事や悩み事があったら相談してくれる	.774	.128	.021
適切なアドバイスをしてくれる	.765	-.070	-.016
あなたが相談するとなんらかの解決策を出してくれる	.764	-.224	-.104
あなたが分からないことは丁寧に説明してくれる	.713	-.165	-.126
役立つ話や有益な情報を提供してくれる	.708	-.019	-.056
意見を求めたら明解に自分の意見を言ってくれる	.652	-.071	-.113
第2因子: 自己中心 ($\alpha=.899$)			
自分の失敗や間違いをあなたのせいにする	-.041	.812	.092
あなたが話しているのに自分で話をまとめたがる	-.193	.740	.043
あなたの話より自分の話を優先する	-.170	.726	.141
日常生活に必要な用件を命令口調で言う	-.264	.710	.241
あなたの失敗や間違いをなじる	-.074	.688	.137
話の内容が気に入らないとすぐ怒る	-.390	.673	.175
夫婦の意見が対立しても、自分の意見を変えたり妥協したりしない	-.379	.544	.234
第3因子: 不適切・非円滑 ($\alpha=.907$)			
言いたい言葉がすぐに出てこない	-.002	.027	.850
あなたの話に対して、反応が鈍かったりずれている	-.192	.195	.793
文法や言葉の使い方が不適切だったり間違っていたりする	.111	.110	.778
あなたの問いかけに的外れな返答をする	-.122	.238	.727
話があちこちに飛んで言いたいことがまとまっていない	-.079	.228	.724
あなたの話のテンポや洒落にのってこない (こられない)	-.276	.160	.720
寄与率	31.443	15.551	15.295
累積寄与率	31.443	46.993	62.288

4.3.2 国際結婚夫婦の特徴

夫婦間コミュニケーション態度の認識構造が明らかになったことから、次に、日本人同士夫婦とその結果、配偶者、及び自分のコミュニケーション態度の認識とも、「親和的接近」($t=2.918$, $df=125$, $p<.01$ / $t=5.272$, $df=122$, $p<.01$)と「非円滑」($t=5.456$, $df=125$, $p<.01$ / $t=2.615$, $df=122$, $p<.05$)の因子においてそれぞれ有意差が認められた。いずれの場合も、国際結婚夫婦の方が日本人同士夫婦よりも値が高かった。

つまり、国際結婚夫婦は日本人同士夫婦と比べ、

比して、国際結婚夫婦にどのような特徴が見られるのか、各因子得点の平均値を算出し、国際結婚夫婦と日本人同士夫婦との間でT検定を行った。配偶者が自分に対し、日々起こった出来事や気持ちを気軽に話してくれたり、自分の話にも関心をもって聞いてくれたりと、情緒的に接近するようなコミュニケーション態度や、適切なアドバイスや情報提供といった情動的にも接近するようなコミュニケーションをとってくれていると認識している。また自分自身も配偶者に対し、同様に親和的に近づくコミュニケーション態度をとっている

Table 2

自分のコミュニケーション態度に対する認識

	因子1	因子2	因子3
第1因子: 親和的接近 ($\alpha=.945$)			
夫/妻の一日の出来事や様子に関心をもって尋ねる	.846	-.064	.128
夫/妻の気持ちに共感しながら誠実に聞く	.835	-.161	.042
役立つ話や有益な情報を提供する	.835	-.024	-.087
意見を求められたら明解に自分の意見を言う	.810	.015	-.056
あいづちを打ったり返事をするなど、夫/妻の話にきちんと応える	.788	-.179	.018
夫/妻が頑張ったことやいいところを褒める	.776	-.121	.076
夫/妻からの相談になんらかの解決策を出す	.769	.092	-.069
出来事や感じたことを気軽に話す	.764	.092	.113
適切なアドバイスをする	.733	.030	-.142
夫/妻が分からないことは丁寧に説明する	.710	.015	-.052
何か心配事や悩み事があったら相談する	.706	.053	.019
夫/妻への愛情や感謝の気持ちを口に出して表す	.696	-.182	.177
第2因子: 自己中心 ($\alpha=.893$)			
夫/妻の失敗や間違いをなじってしまう	-.047	.796	.165
夫/妻の話よりあなたの話を優先してしまう	-.073	.786	.100
夫/妻が話しているのにあなたが話をまとめてしまう	-.075	.762	.055
夫婦の意見が対立しても、自分の意見を変えたり妥協したりしない	-.061	.746	.013
話の内容が気に入らないとすぐ怒ってしまう	-.022	.713	.106
日常生活に必要な用件を命令口調で言うってしまう	-.073	.676	.162
自分の失敗や間違いを夫/妻のせいにしてしまう	.004	.667	.133
第3因子: 不適切・非円滑 ($\alpha=.893$)			
夫/妻の話に対して、反応が鈍かったりずれたりしてしまう	-.084	.174	.813
夫/妻の話のテンポや洒落についていけない	-.069	.163	.795
言いたい言葉がすぐに出てこない	.167	.102	.795
夫/妻の問いかけに的外れな返答をしてしまう	-.066	.217	.759
文法や言葉の使い方が不適切だったり間違ったりしてしまう	.148	.061	.730
話があちこちに飛んで言いたいことがまとまらない	.106	.229	.714
寄与率	29.152	16.400	14.985
累積寄与率	29.152	45.552	60.537

と認識していた。その反面、配偶者と自分のコミュニケーション態度に対し、不適切な言葉の使い方や円滑なコミュニケーションの妨げになるような態度を、日本人同士夫婦より感じていることも分かった。

また、夫婦の間で、コミュニケーション態度に対する認識の相違について検証するため、国際結婚夫婦の日本人夫と外国人妻の間、日本人同士夫婦の夫と妻の間でそれぞれ T 検定を行ったところ、国際結婚夫婦の間では、自分の「非円滑」な態度

の認識において有意差が確認された($t=-2.400$, $df=55$, $p<.05$)。それに対し、日本人同士夫婦の間では、配偶者の「自己中心」的な態度の認識において有意差が認められた($t=2.207$, $df=66$, $p<.05$)。これにより、夫婦間の会話において、日本人同士夫婦の間では、妻が夫の自己中心的な態度をより認識しているのに対し、国際結婚夫婦の間では、外国人妻の方が、自分が誤った言葉遣いや、日本人夫の話への対応の悪さをより認識しているといえる。

5. 結果のまとめと考察

本稿では、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識の特徴を、日本人同士夫婦との比較から探った。その結果、夫婦単位で比較した場合、国際結婚夫婦は日本人同士夫婦より、配偶者が自分に対して情緒的かつ情報的に自分に接近する態度を示してくれていると認識しているとともに、自分自身もまた配偶者に対し同様に親和的態度をとっていると認識していることが分かった。その一方で、配偶者及び自分自身が、夫婦間の円滑なコミュニケーションを損なうような態度や不適切な言語行動をとっていることも併せて認識していた。特に、国際結婚夫婦のうち、外国人妻は日本人夫と比べ、自分が不適切で非円滑なコミュニケーション態度をとっているとより強く認識していた。

これらの結果から、本調査で明らかになった日本人同士夫婦のコミュニケーション態度の認識や先行研究を比較、参照しながら、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識の特徴について考察したい。

野末・岩井(2004)は、親密な夫婦関係の構築には、夫、妻ともに夫婦の関係性に興味・関心をもち、互いの親密性や共感性を促進し相互理解を深めるよう、相手へのコミュニケーションの働きかけが必要であると述べている。この意味において、国際結婚夫婦は、互いの感情や情報を伝達し合い、夫婦間で共感・共有しようとするコミュニケーション態度をとっていると認識しており、親密な夫婦関係を築こうと心がけているといえる。しかも、このようなコミュニケーション態度の認識には、日本人夫と外国人妻の間で有意差は見られなかった。日本人同士夫婦においては、夫と妻との間でコミュニケーションに対する欲求度や関わり方が異なることが指摘されているが(袖井・都築 1985, 上倉 2005)¹、今回の調査対象者である国際結婚夫婦の間では、日本人夫、外国人妻とも、互いに相手の話に対する傾聴や自己開示などの親和的接近態度を行っていると認識しており、これまで言われてきた日本人同士夫婦のコミュニケーション態度の認識の傾向と異なるといえる。

また、国際結婚夫婦の方が日本人同士夫婦よりも、夫婦が相互に親和的コミュニケーション態度をとっていると認識していることについては、一

般的に日本では、感情表出を抑制することがより好ましいという文化的規範があるため、夫婦の間でも自分の思いを率直に示す、配偶者への愛情や感謝の気持ちを言葉で明確に表すなどの情緒的表現は、欧米の夫婦と比べかなり抑制的であると言われていること(東原 2003)が背景として考えられるだろう。一方、国際結婚夫婦の場合、所謂「以心伝心」では伝えきれない文化的相違が夫婦の間に横たわっているため、自分の抱えている気持ちや情報を、互いに言葉で伝え合おうとする意思が一層強く働くものと思われる。

しかし、情緒的にも情報的にも互いに相手に寄り添おうとする親和的態度をとりながらも、国際結婚夫婦が日本人同士夫婦と比べ、配偶者、自分それぞれのコミュニケーション態度に不適切さや非円滑な態度をより多く感じているのは、やはり夫婦の母語やコミュニケーションスタイルが異なるゆえであろう。特に、日本人夫より外国人妻の方が自分のコミュニケーション態度が不適切で非円滑な態度であると感じているのは、夫婦間での主な使用言語が日本語であるためと考えられる。つまり、夫婦の会話では日常的に日本人夫の母語である日本語が使われ、外国人妻の母語が活かされる機会が少ないため、コミュニケーションに対する負担や不安は、外国人妻により重く圧しかかるといえる。しかも、この傾向は、今回の分析対象者のような外国入妻が非欧米系出身である場合に比較的好く見られ、日本語が日本での生活適応上大きな障害となっているケースも少なくない(松本 2000, 石河 2003, 劉 2006)。また、小田切(1997)では、夫婦関係ではないが、日本語母語話者の女性と日本語非母語話者のとの日本語での会話では、日本語母語話者の女性が話題転換の主導権を握っているという知見が示されているが、本研究対象者のような日本人夫と非欧米系出身である外国人妻の国際結婚夫婦においても、使用言語の母語話者である日本人夫の方が、夫婦の会話の主導権を握りやすいと推察される。

しかし、本研究では、日本人夫と外国人妻の間で「自己中心」的な態度の認識に有意差は見られなかった。これに対し、日本人同士夫婦の間では、妻の方が夫の「自己中心」的な態度をより強く認識していた。日本人同士夫婦においては、夫は妻

と深く関わって話し合いをすることを避ける傾向にあり、妻は夫との間で相互に感情や意見の交換が十分なされていないことに不満を抱えていることや、妻の言うことが気に入らなければ、黙る、怒る、無視するなどして一方的にコミュニケーションを中断するなどといった夫の支配的な態度に妻が圧迫感を抱いていることが指摘されている(難波 1999)。今回の調査においても、日本人同士夫婦では、夫の自己中心的な態度を妻が強く認識していることが確認された結果となったが、国際結婚夫婦の間ではその傾向は見出されなかった。これは、夫婦間での主な使用言語が日本語であるため、その母語話者である日本人夫の方が、会話をとりまとめたり、リードしたりすることを夫婦とも仕方のないこと、当然のことと捉えているためか、それとも使用言語では日本人夫の方が有利であっても、実際の会話では外国人妻に配慮したコミュニケーションがなされているためか、残念ながら今回の研究ではその背景までは定かではない。しかし少なくとも、妻が夫の威圧的で自分勝手なコミュニケーション態度をより認識しているという日本人同士夫婦の間で見られるような夫婦間コミュニケーション上の特徴は、国際結婚夫婦の間では見られなかった。

もっとも、国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識について、ほかに問題がないわけではない。

Figure1 に示されているように、日本人夫の職業が「正規被用者」や「家業・自営業」が大半を占めるのに対し、外国人妻は「家事従事」か「非正規雇用者」がほとんどであった。この夫婦、特に妻の経済的地位と夫婦間コミュニケーションとの関連性については、平山・柏木(2001)で指摘されている。平山・柏木では、妻の経済的収入が高いほど、夫は妻に対し共感的なコミュニケーション態度をとる傾向が明らかにされている。また、平山・秋山(2004)でも、妻が安定した職業的地位に就いて高い収入を得ていることが、夫に妻を尊敬する気持ちを促し、夫婦が対等であることを認めさせ、共感的なコミュニケーション態度をとると示唆されている。そのため、本調査の外国人妻の職業的地位や経済的収入の低さは、役割分業の問題に留まらず、夫婦間の対等なコミュニケーションの構築においても看過できない問題だと思われる。

このように、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚夫婦においては、日本人同士夫婦と比べ、互いに親和的なコミュニケーション態度をとっていると認識されているものの、特に非欧米系の外国人妻にとっては、日本語での会話に負担や不安を感じられることが示された。また、夫婦間で使用される主な言語が、日本人夫の母語、すなわち日本語のみであるという偏在性と、それに伴う外国人妻の言語面での負担、及び外国人妻の職業的地位の低さは、対等な夫婦関係構築のある種の極端となっていると考えられる。

他方、日本人同士夫婦においてしばしば指摘されるような、「関係構築のためのコミュニケーションに積極的な妻と、無関心で自己中心的な夫」のような図式は、今回の国際結婚夫婦には描けなかった。この意味からも、日本人同士夫婦の関係性やコミュニケーション態度の認識の特徴をそのまま国際結婚夫婦に移行するのは妥当とはいえないだろう。本研究において日本人同士夫婦と比較することにより、国際結婚夫婦コミュニケーション態度の認識の特徴と独自の問題が、その一端ではあるが見えてきたのではないと思われる。

6. 今後の課題

本稿では、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識を明らかにすることに主眼を置いた。今後は夫婦間コミュニケーション態度の認識と印象の関係などについても検討したい。また、質問紙調査で得た国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識について、今後は聞き取り調査でより深くその内容を掘り下げていきたいとも考えている。

付記

本研究は、科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号:19720120 研究代表者:伊藤孝恵)の助成によって行われた。

注

1. 「日本人の配偶者等」の在留資格で滞在している者には、日本人の配偶者、子など、日本人と婚姻・血縁関係などのある者が含まれている。
2. 本稿では引用部分を除き、「日本人夫」「外国人妻」について、以下のように定義する。
「日本人夫」とは、日本で出生後、少なくとも青年期までを日本で過ごした日本国籍を有する日本語母語話者

で、「外国人妻」と婚姻関係にある男性である。「外国人妻」とは、日本以外の国で出生後、少なくとも青年期までを日本以外の国で過ごした日本語非母語話者で、成人になった後、「日本人夫」と婚姻関係にあり、日本に滞在する女性を指す。そのため、この「外国人妻」の中には結婚後日本国籍を取得した者も含まれるが、本研究の分析対象者には該当者がいなかった。

3. 夫よりも妻の方がコミュニケーション欲求が高く(袖井・都築 1985)、土倉(2005)では、夫が会話を通して妻との関係に対する関心の高さを示していかなければ、妻の孤独感の緩和は困難であろうと示唆されている。

参考文献

朝日新聞(2005)「変身 半世紀 20組に1組が国際結婚」2005年1月8日朝刊

石河久美子(2003)『異文化間ソーシャルワーク』川島書店,141-142,152

伊藤孝恵(2000)「在日外国人女性の『異文化適応』と social support—都市近郊区に在住する日本人と結婚した外国人女性の場合—」『日本文化学報』第9集,437-451

遠藤義孝(1998)「在日外国人—地域に生きる外国人花嫁—」『現代のエスプリ』第376号,74-84

葛慈芬(1999)「国際結婚における地域ケアシステム作りの必要性—中国人花嫁の事例から—」『日中社会学研究』第7号,146-165

木川淳子(1987)「家庭生活における夫婦の共同—分離(3)——中年夫婦のコミュニケーションと夫婦間の理解—」『大阪教育大学紀要 第II部門』第36号,第2号,57-68

佐竹眞明(2006)「農村花嫁:業者仲介による結婚」『フィリピン—日本国際結婚—移住と多文化共生』佐竹眞明・メアリー・アンジェリン・ダアノイ(共著)めこん,57-79

施利平(1999)「国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割」『年報 人間科学(大阪大学人間科学部 社会学・人間学・人類学研究室)』第20号 第2分冊,421-437

施利平(2000)「婚姻満足度の規定要因としてのコミュニケーション—国際結婚夫婦を対象としたカップル単位の分析から—」大阪大学人間科学部『年報人間科学』第21号,166-167

袖井孝子・都築佳代(1985)「定年退職後夫婦の結婚満足度」『社会老年学』No.22,63-77

竹下修子(2001)「国際結婚カップルの異文化適応と結婚満足度」『金城学院大学論集 社会科学編』44,127-137

東原麻奈美(2003)「中年期女性のアイデンティティ研究に関する一考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第43巻,165-173

土倉玲子(2005)「中年期夫婦における評価ギャップと会話時間」『社会心理学研究』第21巻,第2号,79-90

難波淳子(1999)「中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての—考察—事例の分析を通して—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第8号,69-85

新田文輝(1995)「最近の日本における国際結婚—接近と交換理論を中心とした試論」『吉備国際大学社会学部研究紀要』5号,95-109

野末武義・岩井昌也(2004)「夫婦のコミュニケーションに見るジェンダーの問題」『家族心理学年報 22 家族内コミュニケーション—こころを運ぶことばの力』金子書房,112-125

平山順子・秋山泰子(2004)「夫婦の職業生活とコミュニケーション」『家族心理学年報 22 家族内コミュニケーション—こころを運ぶことばの力』金子書房,53-66

平山順子・柏木恵子(2001)「中年期夫婦のコミュニケーション態度:夫と妻は異なるのか?」『発達心理学研究』第12巻,第3号,216-227

法務省入国管理局「平成20年末現在における外国人登録者統計について」<http://www.moj.go.jp/PRESS/090710-1/090710-5.pdf>

松田智子(2000)「『夫婦する』行動の3つの次元」『社会学部論集(佛教大学)』第33号,61-71

松本佑子(2000)「在日アジア系女性の就労実態と生活問題」『聖徳大学研究紀要 人文学部』第11号,23-30

松本佑子(2001)「国際結婚における夫婦関係に関する一考察—フィリピン妻の意識を中心に—」『聖徳大学研究紀要 人文学部』第12号,17-22

劉榮純(2006)「日本における国際結婚—韓国人妻のアンケート調査・分析を通して—」『ブール学院大学研究紀要』第46号,69-85

Gray,J. (1992) *Men Are From Mars, Women Are From Venus*. New York: HarperCollins Publishers. (大島渚(訳)(2001)『ベスト・パートナーになるために』三笠書房,45-47)

いとう たかえ/山梨大学

takaei@yamanashi.ac.jp

Recognitions to Mixed marriage couples' communications attitudes

ITO Takae

Abstract

This research, conducted in Japan, aims to search for the recognition regarding communication attitudes of mixed marriage couple consisting of "Japanese husband and foreign wife" compared with Japanese marriage couples. In the result factor of the analysis concerning the recognitions regarding communication attitudes and the spouse, it was shown that each one consisted of 3 factors. These factors are "Harmonized approach", "Self Centeredness" and "Non-smoothness". Regarding the factors of recognition relating to the communication attitudes, mixed marriage couples recognized that they have a "Harmonized approach" and "Non-smoothness" attitude more than Japanese marriage couples. In addition, between Japanese husband and the foreign wife of the mixed marriage couples, the foreign wife had more recognition than the Japanese husband that she had taken "Non-smoothness" communication attitudes.

【 Keywords 】 Mixed marriage couples, Husband-wife communication, Harmonized approach, Self-centeredness, Non-smoothness

University of Yamanashi